ノルニルの館

I

これは夕暮れが作り出した幻想か、あるいは夢なのだろうか。

玄関へ続く石畳の上に現れた見知らぬ後ろ姿に、三堂静（みどうしずか）は思わず立ち止まった。足音に気づいて、その背中が雨露を払い振り返る。

目が合った。

一瞬、時が止まったように思えた。

古い洋館へ続く小路に沿って金木犀の花が咲きこぼれる、密やかな秋の一日（いちじつ）だった。景色を濡らしていた小雨はいつの間にか通り過ぎ、花の甘い芳香が辺りを包み込んでいた。

その中に立つのは、やけに古風な出で立ちの少女。

桔梗の花が描かれた着物に身を包み、黒髪を大きな紫紺のリボンを結んでいる。その姿は映画やドラマに登場する大正時代の女学生を思い起こさせた。

少女の瞳がわずかに見開かれ、小さな唇が動いた。

「……どなたさん？」

鈴を転がすような可憐な声。そっと眉を寄せ小首を傾げる。繊細な輪郭が夕焼けの金色の光に縁取られ、淡く浮かび上がった。

静は咄嗟に言葉を返せず、背中に抱えていたチェロのケースを取り落としそうになった。雨に濡れた前髪からぽたりと雫が鼻先に落ちる。

この不可思議な事態を上手く飲み込めない。

誰もいなかったはずの場所に、前触れもなく人間が現れたのだ。驚かないほうがおかしい。口を開くも声は喉の奥に張り付いてしまったようだ。

大きな黒い瞳はじっと静の瞳を捉えている。髪を濡らす雨露が宝石のように煌めく。

「あの……」

「君は、――」

少女の戸惑いの声と、乾いた青年の声が重なる。

その一瞬、辺りをまばゆい黄金色に染め上げて夕日が彼方へと沈んだ。思わず細めた視界の隅で、少女の輪郭がかげろうのように揺らめく。

たちまち、その姿は消え去った。跡形もなく、夢のように。

「彼女はいったい……」

呟いた声は、宵闇の静寂の中へと溶け込む。

風に乗って金木犀の香りが濃く忍び寄り、静の身体を包み込んだ――。

Ⅱ

日本に住む祖母が倒れて病院へ運ばれたと一報が入ったのは、ドイツでのコンサートを終えて間もなくのことだった。

静はエージェントの手配したチケットを握り締め、パスポートに旅行鞄ひとつと大事な楽器を抱え、数年ぶりの故郷へ飛び発った。その時は仕事続きの疲労すら消え、頭の中で最悪のシナリオを絶えず飛び交わせながら、飛行機の中で一睡もできずに日本に降り立った。空港でタクシーに乗り換え、高速道路の長い道のりが段々と見知った景色に変わっていくのを逸(はや)る気持ちで見つめていた。

ようやく辿り着いた病院の一室で、祖母はけろりとした様子で静を出迎えた。

「あら、静さん」

のんびりした声で呼ばれる。

「うちの可愛い孫ですよ」と、祖母は点滴の取り換えをしていた看護師ににこやかに紹介している。ぎこちなく会釈を返し、ふたりきりなるのを待ってから、静は固い丸椅子に腰かけた。全身から力が抜けて、深いため息が出た。

「あらあら、そんな大げさなことではなかったのに。ちょっと貧血で倒れて、検査入院し

ましょうねってお医者様が……あら、あなた何も食べてないでしょう?」

青い瞳の祖母はベッドに横になったまま、久しぶりに会った孫の心配をしている。

その穏やかな顔を見るうちに、静は張りつめていた気持ちがゆるやかにほどけるのを感じた。気が抜けたのか、疲労がどっと押し寄せ、だらりとベッドの端に頭をうずめた。

祖母の手がそっと触れ、髪を漉くように撫でられる。身を任せたままにしながら、その手の温かさを懐かしく思った。開け放たれた病室の窓から、忘れかけていたこの街の秋の風が吹き込む。

祖母とはスマホの電話機能やメッセージで連絡を取り合っていたが、音声や文章のみのやり取りだった。時差だったり、自分が連絡をまめにとらない性格も相まって、それも時々の頻度。

久しぶりに見た祖母の笑顔は記憶の中と少しも変わらないようで、けれど会えなかった三年の中で短く整えられた髪がブロンドから全て白へと変わり、皺も少し増えたようだった。それに化粧をしていない白い顔と少し痩せた頬、細枝のような手首と手の甲に浮き出た青い血管――離れて暮らすようになった月日の長さを、こんな形で突きつけられるとは考えもしなかった。

「お帰りなさい、静さん」

頭に降り注いだ言葉に、顔を上げる。

手を握り返し、「ただいま、ハナさん」と静はようやく微笑むことができた。

一週間入院をする旨の説明を担当医から聞いた後、家に残した愛猫の小鞠が心配だと言う祖母を安心させるためにも、静は面会を切り上げて一旦三堂家の洋館に帰ることにした。

ことの次第をエージェントにメールで送ると、英文で「スケジュールを調整して、一ヶ月の休みを取れるようにした。俺の努力を水の泡にしたくないのなら、ちゃんとおばあ様孝行するように。お前にも今後を考える時間が必要だろうから」と返事があった。皮肉めいたところがあるが、何でもお見通しらしい。近頃、休め休めと小うるさく言われていたことを思い出し苦笑を浮かべた。

世界的チェリスト・三堂静――それが、クラシック音楽界が静に与えた肩書きだ。

七歳の頃に出会った美しく艶やかな弦楽器にたちまち魅了された静は、高校卒業と同時に祖母の故郷ロンドンの音楽大学に特待生として入学し、その数年後に首席で卒業した。プロの奏者になってからはオーケストラの客演やソロコンサート、音楽の研究で忙しない日々を送っている。日本には三年前にコンサートのために一度来ていたが、故郷である京都に帰ってきたのは実に五年ぶりのことだった。

三堂家の屋敷は銀閣寺から哲学の道へ入りしばらく歩いた先、疎水沿いにかかる橋を渡った一本道の向こうにひっそりと建つ洋館である。大正初期に建てられたその外観は青い屋根と白い漆喰の壁が特徴的で、庭にはそれぞれ季節の花木が植わっている。かつては大学のお雇い外国人の住まいとして使われていた屋敷だったそうだが、三代前の三堂家当主が買い取ったという。

この屋敷に帰ると、まるで時を遡ったかのように錯覚する。

艶やかな床板にウィリアム・モリス風の壁紙、そして綺麗に磨かれたアンティークの調度品。いたるところにアール・ヌーヴォーの趣向が見て取れ、現代的なものはここでは息を潜める。洗練された品々ばかりなので少しも古臭く感じないのだ。

両親が性格の不一致で離婚し、仕事で忙しい父の様子を見かねた祖父母に引き取られた静は、少年時代をこの温かで懐かしい香りのする屋敷で過ごした。

玄関のすぐ側にある階段を上がると、静の過ごした子供部屋、祖父母の寝室、客室と祖父の書斎がある。

その書斎から流れるチェロの調べを静はよく耳にしていた。演奏は祖父のささやかな趣味だったのだ。滑らかなその音色は少年の心を癒し、ある春の良く晴れた日、祖父にチェロを教えて欲しいと緊張した面持ちで伝えた。

祖父は眼鏡の奥で柔らかく目を細め、そっと静の頭を撫でチェロの弓を手渡した。それが始まりだった。

以来、チェロは静にとって苦楽を共にしたいわば生涯の親友である。コンクールのための厳しい練習に耐えられたのは、この美しい楽器は自分を裏切らぬという確信と、祖父母の温かな支えがあったからだ。そして、幸いにして自分とチェロは相性が良かった。詩的に語れば、『運命的な出逢い』だったのだろう。

けれど、積み重ねてきた自信に小さな亀裂が入ったのは一年前。

鮮明だった自分の音が、ある日からノイズが混じったように耳に届いた。意識したとたん、それはあっという間だった。生じたかすかな違和感は、瞬く間に亀裂を広げた。望んだ音が出ない焦燥感。

スランプなら経験したことがある。しかし、これは違う。もっと正体不明で、まるでどこからか影が迫り来るような——。

気がつけば、何かに追われるように、静は練習と仕事に没頭した。

曲がりなりにもプロなのだから、完璧な演奏をしなければならない。隠し通すつもりだった。しかし、エージェントは静の不調に気づいていたのだ。

今も底なしの闇は大きく膨らみながら、自分を追いかけてきている。いつか追いつかれ

るのではないかと不安になるときがある。追いつかれたその先のことなど、考えたくはなかった。考えれば考えるほどそれは自分を取り込もうとするのだ。

懐かしいこの場所なら、影はやってこないだろうか。

それに、出逢ってしまったのだ。不思議な雰囲気を纏った少女に。

自分の部屋の電気をつける。キャリーケースを隅に置き、いつもの癖でチェロの点検を行う。ふと静は窓の外へと視線をやった。外はすっかり蒼黒色に沈んでいる。脳裏に数分前に見た少女の姿を浮かべ、記憶に留めるようにゆっくりと目を閉じた。

続きは本書でお楽しみください。